

TADESKA 2009年9月5日

題目：「第二外国語としてのスペイン語教育における効果的な小テストと課題について」

担当：安保寛尚

活動内容

1. 論文要旨報告 → レジюме 参照

対象論文：上田博人、2004、「第二外国語としてのスペイン語教育における小テストと課題」、『スペイン語学研究』、東京スペイン語学研究会、第19号、pp.121-133.

2. 討議

論文内容、議論のテーマについて話し合われた事柄や寄せられた意見をレジюмеの項目、テーマ別に箇条書きする。また、今回の発表は録音され、それをもとにTADESKAの世話役からレジюмеや話し合いの内容が著者に届けられた。その後、いくつかの疑問について著者からの回答が得られたので、これも併せて記す。

1. 外国語能力を測定するテストの二分類

- ・「N R Tに近いC R T」の意味がよくわからない
→実際にはN R TあるいはC R Tの特徴すべてを備えているテストというのは稀ではないか
→例えばD E L Eであっても基本的に絶対評価であり、また受験生のレベルに応じて級が設定されているので、正規分布するか疑わしい

4. 実際（テストと課題の評価）

- ・小テストはC R T評価(絶対評価)であるが、総合評価では相対評価を取っているのはなぜか
→＜著者の回答＞
「大学の申し合わせで相対評価が原則であるため。「優」は3割。」

5. 検証(授業と課題についてのアンケートについて)

- ・「効果あり」と「楽しい」をもとに回答の類型を示しているが、その評価判断がいまいである
→＜著者の回答＞
「本論文では、統計的な方法や実験操作による判断をしていない。したがって主観的な判断になるが、その判断の主観性を大事にしたかった。自分が学んでいることがどういうことなのかを考えてもらい、自分で判断しながら方法を開拓していけるとよいと考えている。結局、すべての学習は主体性がなければ身につかないので、「学ぶことを学ぶ（発見する）」ことを促している。実際授業は騒がしくなるが、指示待ちではなく、縛りなるべく外して自由に羽ばたいてもらいたいと考えている。アンケート結果のパーセンテージは、単純に全体の中で「効果がある」と答えた人の割合で、判断は50%を基準としている。」

- ・「音読」の課題は「効果あり」の数値が高いが、録音を提出させるなどしなければ本当に行ったか、正確な発音で読んだか、などを確認することができない

→授業での音読について、全員で教師に続けて発音することは達成感を感じたり、やる気を起こす生徒もいるが、スピードの違いでバラバラになったり、適当に読む生徒もいるという問題がある

→音読の課題の例としては、制限時間を設けて一定量の文章を読めるようにしておくというものがある

- ・授業活動中の作文シートはどのように使用されるのか

→＜著者の回答＞

「作文交換は、たとえば、Me gusta＋不定詞を使って自由に文を作り、相手の人に向かって声を出して発信させる。相手の人はそれを書き取り、書き取ったものを見せて確認し、役割を交代して交換する。後に教師が指名して、黒板に書かせ、最後にこれを評価・訂正する。WEBが使える環境では、フォーラムを立ち上げ、全員が書き込み、これをできるだけ多く教師が評価・訂正する。これは仲間がたがいに教えあうことは非常に効果が高いという筆者の経験に基づいた活動である。交換シートは一定の数（20）が集まったら提出させ、1ポイントを加算。ポイントの最終評価点におけるレートは、全体の点数のバランスの中で決める。」

- ・「効果があり楽しい」「効果がある」課題は続ける、と論文には書いているが、2009年度の課題に音読と全文筆写がなくなったのはなぜか

→＜著者の回答＞

「2009年度は文法の担当で、音読と全文筆写は、教科書の本文を担当するときに実施している。それは、文法で扱っているばらばらの文を読み進めることは不自然でよくないと考えるためである。むしろ文法の仕組みを考えさせることや、それを応用して文を作ってみることを授業の中心にしている。有限の文法規則で無限の表現が可能になると言って学生のモチベーションを高めている。」

6. 終わりに

- ・異文化理解の「気づき」は、どのような課題により実現が可能になるのか

→ビデオクリップが役立っているのではないか。例えば頬にキスを交わす挨拶は、それを知らない日本人にとっては驚きであり、文化の多様性への興味をもたらす可能性がある

議論のテーマ③ 単語テストの設問のあり方

- ・単語の意味の不確定性、つまり意味のバリエーションの存在を生徒に前提として伝える必要がある。その上で単語の核となる意味を覚えることは別の、不可欠な学習ではないか

議論のテーマ④ 「西文和訳」「和文西訳」は必要か

- ・単語の定訳を教師が強要するのではなく、語意等に幅を持たせた指導、採点を行えば問題ないのではないか

- ・句や文脈から訳にアプローチする試みが必要ではないか

議論のテーマ⑤ 課題の内容について

- ・最近のテキストは抽象的でありにも簡素な説明が多いので、特に初修の段階で予習はさせるべきではない

- 予習をしていないと授業が思うように進まず、また生徒中心の授業ではなくなってしまう

- 学習した内容に合わせて予習の程度を変えることはできる

- 予習の段階で学生が主体的に考え、疑問点を持ってくることも重要ではないか

- 予習をさせると学生が混乱する

- テキストの説明だけでは暗闇で手探りさせるようなものなので、予習はさせず復習を求める。ただし、応用の授業では予習をさせる。

- 前の授業で簡単な説明をしたうえで予習をさせることがある